ハイデッガー論

馬場喜之

1. 》Nietzsche Schule《という呼称がある。この呼称は哲学の内からいわれたのでなく，また事実上そのようなものが哲学史のなかに存在しなかつただけ，哲学の内での論に，ここに考察のいとぐちを求めることは，この際意味あることにおもわれる。何故なら哲学内の同族結婚が哲学的視野の狭隘化を招きつづけてきたのが昨今の実状であるから。（それはまた，今日いわゆる実存哲学の一巨匠としての存在を保ちつづけており，また評価をうけつづけている Heidegger についても，もう一度，よりひろい枠の中でその位置を検討することをせまるものでもある。）

Nieztsche Schule ということは何よりも先ず近代文学の中でいわれた。Th. Mann の規定によれば——その学派の精神は，芸術家という概念と認識する者とを等値として理解している。芸術と批評とははつきり限界付けをもつたものではない。この派には，全く詩人的な気質の批評家と，精神についても文体についても完全な批評的規律を守る詩人とがいる。この種の芸術家は，つまらない種類の芸術家ではないと思われるが，認識し表現しようとする，深く認識して美しく表現しようとする。そして認識表現という二つのものから離すことのできないさまざまな苦痛を辛抱強く誇らかに耐え忍ぶことが，彼の生活に道徳的尊厳を与える，と考えている。（Th. Mann ; Bilse umd ch. (1906). in "Altes und Neues" s. 27.）

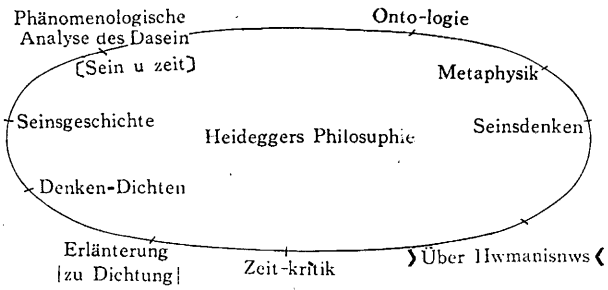
要約すれば芸術，批評，言葉，認識等一連のものの価値のストイックな精神による尊重である。ここで強調されている認識が，近代認識論的哲学でいわれている対象化的認識とはどこかちがつたものであり，すぐれて本質直観，根源直観の意味をもつものであり，このような認識概念を中心に，詩人と文人が歩み寄つている——別していえば，詩人と批評家の複合体存在が生れている。

批評，批判<Kritik>はこれまで哲学のことがらであつた筈である。われわれは，そこで，上の規定が，すでに20世紀の哲学への Nietzsche Schule の精神の浸透にふれているはしりをみるわけだが，これに加うるにニイチエの問題の複雑さがある。

ニイチエはすでに歴史的現象となつた。ニイチエの存在とニイチエの言説とは，或いは混合され，或いは切りはなされながら，20世紀の歴史の進行の重要な Epoch にはつねに顔を出した。帝国主義，ヨーロッパの危機，ニヒリズム，近代の超克，新しい価値などなどが語られるときには，ニイチエは陰に陽に引き合いに出されないことはない。しかもそういう事態がまた歴史的現象にくり入られながらなおとどまるところがない。誰も Nietzsche 問題を完全に片付けたと自称することができない。

今日 Nietzsche Schule という言葉を使う——或いは使えるということは，このような全体的，歴史的相貌をみつめながらである。そしてこのような仕方で Niestzche Schule を問うということは，哲学，芸術，政治，文学を一つの大きな地平の中で，問うということになるであろう。

2. Heideggerの哲学的業績を業績を概括することはむずかしい。以下，素描的に，かれの扱つたいくつかの問題領域を区分けしつつ挙げてみよう。：——



円環的に表現したのは理由のないことではない。すなわち，一個人の思想の本質をとらえるのに，後期を前期を止揚してしまつた発展としてとらえたり，或いは前期と後期を瞭然と区別して考えたり——その代表的な例は Dilthey の Hegel 観にあらわれている。また Vaihinger の Kant 観も，小さいがこの種の例にはちがいない——，またその間に転向（Kehre）を考えたりする——Heidegger の場合にはこの Kehre がやかましくいわれている——考え方から，一応自由になつておかうとするものである。

現存在の現象学的分析——Dasein の根本様相を時間性においてとらえ，Existenz としての人間と Das Mann としての人間との区別を描き出し，存在そのものは Existenz としての人間の存在了解の可能性のうちにとらえうるものとなるとして救い出す。人間の Dasein は存在了解の可能性として始めて Existenz になる。Dasein は Dasein の中にありながら，そこから出て立つ Ek-sistenz ことの可能性をもつ。また，Dasein は世界内存在 In-der-Welt-Sein という重要なる規定。

Ontologie-die fundamentale Ontologie。——Dasein への沈思は哲学の基盤を，認識論的哲学の中ではヴエールをかけられ，見失なわれていた人間のうえにつれもどす。その意味で Ontologie は哲学的人間学の意味合いをもつが，同時にそのような存在論はもはや従来の Ontologie から自己を区別した基礎的存在論に脱皮していなくてはならないし，基礎的存在論にして始めて哲学的人間学の不明瞭な理念を正すことができる。

》Über Humanismus《——これは論文の標題であるとともに，Heidegger の哲学の性格をもあらわしている面白い視点である。そのためにはしかし，これを＜ヒューマニズムについて＞とではなく，＜ヒューマニズムを超えて＞と読む読者の工夫が必要とされる。人間が存在の牧人であること，ここに肝腎なことがある。しかしこれはすでにヒューマニズム——少くとも近代ヒューマニズムの成り立つ枠をこえ出ている。そしてこの境域に立つとき，ヒューマニズムは自由投企のやかましい騒乱の世界に化すのである。

Erläuterung zn Dichtung——詩の解明——詩に対する開明。言語は存在の住まう家である。そのような言葉に値する言葉は，詩においてあるのみである。存在を気づかう思惟する者は，詩という言語において顕現している存在のすがたをもとめる。同時にそのような解明は，解明する思惟が，詩の内実を明るみにもたらしつつもはや己れ自らは無用な長物と化すということをこそねがつている。

Zeit-Kritik——時代＝近代批判の課題は，そもそも時代＝近代というものをどのようにとかえるか，その特質をどう取り出すか，ということであり，次いで，その特質をもつ時代をいかにみるかということである。Heidegger は近代の本質的諸現象をあらまし，科学，機械技術，美学，文化の

支配，神々の退位という風にみなす。それらの底にあるものは，人間を根源的な存在経験から離反せしめる傾向であり，それと気づかないうちに陥らしめるニヒリズムである。時代批判は近代人にとつて必然的となつた各自の「存在証明」であるのだが，Heidegger のその証明の仕方はまさに「<存在>の使徒」としてのそれである。

Seinsdenken: Entwürfe zur Geschichte des Seins als Metaphysik——<存在の思索>とは，存在の明るみの中で可能となる思索である。（存在についての思索といつたような対象化的思惟ではない）。実はここにこそ哲学の窮極の根があつたのであるが，そのような存在の思索は，実はこれまでそれほどはつきりしていなかつた。従つて存在そのものもまだ本当にわれわれの関心となつたとはいえない。存在を主題としてきた筈の Metaphysik が実は本当の存在をおき忘れてきてしまつている。これまでの Metaphysik を一旦揚棄した上で，存在の歴史を真の Metaphysik として企図することが課題となる。

さて，Nietzsche Schule として Heidegger を問うこと——一体 Heidegger はいかなる意味で Nietzsche Schule であるか。

3. <存在>の使徒 Heidegger は「存在」の意味をきわめてユニークに語らいつづけているが，しかし盤石の根拠とするところをもたないわけではない。それはギリシヤである。それも正真正銘のギリシヤ——これまで種々な思想，ヒューマニズム，文化のさまざまな契機として使い古されたギリシヤでなく——である。正真正銘のギリシヤとは？　そもそもギリシヤ的現存在を，ギリシヤの悲劇を通じて解きあかそうとした最初の大胆な追求者がほかならぬニイチエである。その帰結を公式的にあらわせば，アポロン的形象化精神とデイオニソス的音楽精神との形而上学的統一であり，ギリシヤ的現存在は生の可能なかぎりの緊張を秘めた静謐，統一なのである。しかしここで問題なのは，これとの平行像として描き出され，とらえなおされたギリシヤ哲学の本来のすがたである。正真正銘のギリシヤ的現存在から生れた——それの対応物である悲劇の，哲学上の等値物は，あの悲劇のレアリスチックな緊張を止揚してしまつたプラトン以後の哲学ではない。そうではなく後代が一括して<Vorsokratiker>とよぶところの哲学者によつて遂行された哲学である。それはヘーゲル以後の発展史的哲学があやまつて自然哲学 Naturphilosophie として——甚だしきは素朴な物活論といつている——特徴付けたものであるが，いまやその誤解は正されなければならない。この点においてもまた Nietzsche は先蹤者である。「悲劇時代におけるギリシヤ哲学」において Vorsokratiker は，健康な成熟せる巨匠たちという献辞をうける。この精神に触発をうけて，以後ギリシヤ哲学の全構造の理解は大きな変革をうける。

アリストテレスがいつた，哲学の問いは，いまも昔も存在への問いであり，哲学固有の課題は存在の探究であるということは，実はそのもつとも顕然たるすがたを，ギリシヤ初期の思索家たちに担われていたのであつた。

Nietzsche Schule の一派である Jaspers は，「ソクラテス以前の哲学者には<ものの初め>に存するあの独特な魅力がある。彼らを実際に即して理解することはむずかしい。……ソクラテス以前の哲学者にあつては，思想は根源的な存在経験の直観から苦労しながら生れ出ている。……決して再び帰ることのない様式的統一が各自に独特なものとして，それぞれの偉大な思想家の作品を支配している。ただ断片が伝けられているのみなので，ほとんどすべての解説が自己流に解釈するという誘惑に負けてしまいやすい。一切のものがここではまだ謎にに満ちている」（Einführung in die Philosophie. s. 150）とだけいつたが，Heideggerはさらにその途を先に歩みつづける。》Ein--führung in die Metaphysik《 はその圧巻である。

ギリシヤ初期の哲学を正しくとらえなおす第一歩は，それを自然哲学とあやまつてよんだ原因をとりのぞくことである。つまりギリシヤ語の φισισ（physis）は，決して今日のせまい意味の自然（natura）ではないのだ。

「ギリシヤ人は physis が何であるかということを自然の諸事象において初めて経験したのではなくて，その反対である。存在についての詩作的—思考的根本経験が基礎になつて，かれらが physis と名付けざるをえなかつた或るものが彼らに解示されたのであつた。この解示を基礎として初めて，彼らは狭い意味の自然を見る眼を持ちえたのであつた。したがつて physis はもともと天をも地をも，石をも植物をも，動物をも人間をも，人間と神々との作品としての人間の歴史をも意味し，最後に，そして第一に命運 Geschick の下にある神々自身を意味する。physis は発現する支配と，その支配によつてあまねく支配せられた永続とを意味する。この発現し，滞在する支配の中に，「生成」も，動かないでじつとしていることという狭い意味での「存在」も，ともに含みこまれている。physis は発一生，すなわち隠蔽されたものから自己をつれ出し，そのことによつて初めて隠蔽されたものを存立へとつれこむことである。」（S. 11～12）ギリシヤの哲学はその＜偉大な始まり＞からして存在の哲学であつたのであり，パルメニデスにおいてその強固，精緻さは頂点に達するが，ヘラクレイトスといえども，通俗的哲学史がいつている如くパルメニデスの対極にあるのではなかつた。「もしヘラクレイトスがパルメニデスとは違つたことを言つたのだとしたら，ヘラクレイトスは決して偉大なギリシヤ人の中の最大の一人とはならなかつたであろう」（S. 74）

そしてこのような存在の思索こそプラトン以来——或いはプラトンを介して後代が見失なつてしまつたものなのである。

Heidegger はさらに存在と生成，存在と仮象，存在と思考，存在と当為，という関係についての近代的誤解を正す。これらの真実の内実的連関をとらえるには，きびしく存在に帰属しつつ思索するということが大切なのである。on と rei, physis と phainesthai, physis と logos というギリシヤ語の正しい理解は，まさしく，このきびしく存在に帰属しつつ思索するという，近来われわれには非常に困難になつている態度を想起せしめるであろう。

4. 以上，初期ギリシヤの＜存在＞に投錯する Heidegger の Denken は Nietzsche の一つの途にすぎない。この途以外においても Heidegger はまさに Nietzsche Schule である。すなわち先ずキリスト教において，次いでドイツにおいて。この二つの途——そう正しくは前のも含めて三つは，Nietzsche において——Heidegger においても——思想の分ちがたい Leitmotiv を形成している。Nietzsche のギリシヤ悲劇への傾頭は，反面に，その再誕生を当代のドイツに発見しえたという情熱的認識に支えられていた。すなわち Kant 及び Schopenhauer，さらに決定的には Wagner の楽劇がそれである。しかし Kant は早急に，Schopenhauer も漸次，Wagner もそれにならつて，ニイチエの眼にはそれらが生粋のギリシヤの嫡子とはみなされえなくなる。それは，表面はともあれ，また彼らの自覚の有無に拘わらず，キリスト教（倫理）の変装せるものであり，＜キリスト教＞とは実は生に対する弱者のレサンチマンではないか，正真正銘のギリシヤ的尺度からみて生の頽廃にほかならず，ワーグナー楽劇における陶酔は死への溺惑（耽溺）なのである。

この，Nietzsche の，ドイツに含まれたキリスト教への批判は，やがて極端にまで昂まる。そのなかに，ドイツ（Wagner）への愛しながらの批判～訣別をひめているこの過程において，尺度はつねにギリシヤであり，一方に時代に目を向けての，無効のキリスト教を誰ももはや信じていないのではないかという認識——„Gott ist tot“——他方に，彼自らの到達点のとぎすまされた意識における告白——Gekreuzte contra Dionysos ＜十字架にかけられた者対デイオニソス＞ と極わまる。

ところでこの到達点の形而上学的表現は一切は<権力への意志> Wille zum Macht であるということであるが，存在と意志との等置は実はすでにドイツ観念論の主要なモチーフの一つでもあつた。すなわち≪意志と表象としての世界≫を書いたショオペンハウエルにとどまらず，カント，フィヒテ，ヘーゲルにおいてこの傾向は萠していたのであり，シエリング哲学の有名な命題は "Wollen ist Ursein"（意欲することが原存在である）という。ニイチエの権力意志哲学は，この意味ではドイツ観念論の完成した形を打ち出したものにほかならない。

この，ギリシヤ—キリスト教—ドイツを Leitmotiv とするニイチエの思想回路は，そのまま Heidegger のそれをすみずみまで規定している。ちがいはその歩み方にある。それというのも，Heidegger の場合には，かれの前にほかならぬ Nietzsche がいて，これらモチーフの問題性を一つの事件となるほどに徹底的に考えぬいたことに起因しているのである。

Heidegger が初期以来，一貫して「存在」を追い求めてきたことはすでにみた。そして人間の実存することの可能性を存在了解にあるとした地点より，そのような存在了解も実存することも，むしろ存在そのものに根拠があり，人間は存在の牧者である，という地点まで歩んで，まさに<存在>の使徒となるまでの Heidegger にあつて何よりも先ずかれの念頭にあつたのはギリシヤ——初期ギリシヤ——であつたこともまたすでにみた通りである。かくして Heidegger にとつて哲学史の全体は次のように映る。すなわち先ず存在の思索があつた。つぎに存在の忘却がおとずれた。いまや再び存在への帰郷がはたされ，存在の思索がよみがえつてこなければならない。

Heidegger にとつてキリスト教とドイツとは Nietzsche そのものが集約している。ニイチエの命題，神の死はハイデツガーにとつてキリスト教の要約であり，Wille Zum Macht はドイツ近代形而上学の総決算である。この二つからでてくる《Nililismus》を新しい形而上学の枠内で処理することに，再びギリシヤが強力なものになることは容易に推察がつく。つまり，キリスト教はもとより，Nietzsche による近代形而上学の完成も実は存在忘却の一形態にほかならない。

もしドイツがこの上さらに求めらるべきであるなら，それは別なるドイツ，存在忘却の頁を占めるドイツではなく，ギリシヤの存在を近代的にでなく，根源的にとらえることにたえたドイツでなければならない。<ギリシヤとドイツ>，この課題は古いものであつた。ひとたびはゲーテがギリシヤを彼の自我圏に吸収する大事業を試み，のこるところはないという意識をドイツ人に与えた。しかしこれも近代的誤解である。

》帰郷《 Heimkunft という象徴的でありうる表題をもつ Hölderlin の詩を Heidegger は極めて意図的にとり上げている。ヘリダーリンこそギリシヤの存在に，その住まう言葉（場所）を与えた詩人なのである。この存在に帰属しつつ詩作した詩人を深く真に理解することのなかつたことこそ，ドイツ的現存在の充実の欠如，<欠乏の時代>たることを証拠立てるものである。ドイツへの帰郷，Hölderlin の真の解明，Dichten=Denken，これらはみな存在への帰郷——ギリシヤの<偉大な初まり>において顕然たるものとなつた「存在」への帰郷と一つことなのである。

5. Heidegger 70歳記念の Festschrift に一つの献詩がおさめられた。

Ilse Aichinger
Versuch
Zwischen Leiter und Nordwand,
Besuch am Nachmittag
und verworfenem Holz,
Apfel-und Schneeresten,

意訳。ここ山腹と北に面して立つ絶壁との間，時は午後（ヨーロッパの，ドイツの歴史の偉大な<正午>はすぎてしまつた午後），訪ねる者ありて，投げ倒された材木，林檎の樹の枝にのこつている果実や残雪を，一つの秩序ある関係に建て直そうとする。このつとめ

は止むことがないのだ。
　イルゼ・アイヒンガー――「試み」

ein Verhätlnis herzustellen,
das unaufhebbar ist.

Heideggers Philosophie の顔貌が，この文字の脊面にしずかに立ち上つてくるのが感じられるではないか。

6. いささか奇妙なことだが，ここえきて私は倉橋由美子の寓話的な小説「蛇」をおもいうかべる。この小説の中で，蛇は主人公の口腔から胃の中に侵入し，長時間滞留する。その期間中蛇は主人公にとつてずつと担わされた問題でありつづける。ある日しかし衆目環視の中でこの蛇は突然主人公の臓腑の中から姿をあらわしてくる。それのみではない。衆目のなかに顕在した蛇は，その顕在化の運動のつづきにおいて，今度は主人公を呑みこんでしまい，ふくれ上つた腹を横たえてうずくまる。それ自身はなはだ奇妙な小説が，ここで一つの寓意を投げかけてくるというのも奇妙なことである。臓腑につきささつた蛇はまさにギリシヤ的現存在――ギリシヤの「存在」であつた。そうしてヨーロッパの，ドイツの，Heidegger の思索する心臓に命運として滞留したかの「存在」はいまやその思索の主体をのみつくしてやまない力ある真理となつたのである。だからこそわれわれもこの壮大な思想史劇の意味を問うのである。奇妙な寓話に託したが，この問いそのものは意味深いものと私はおもう。